みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「ピラート」はデルフィーノか? : イタリア・R町の人々 : キャラクター分析の可能性をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 妙子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5585

「ピラート」はデルフィーノか？…イタリア・R町の人々

――キャラクター分析の可能性をめぐって――

宇田川　妙子

序　「名前」と社会生活

「アンジェリーッ！アンジェリーナ！」、買物帰りの中年女性が、ある窓下で立ち止まって声高に知り合いを呼んでいる。「マーリオ」「エルネー」、人々は、すれ違いざまに互いの名前を呼び交わして挨拶していく。イタリアのローマ近郊にあるR町（仮称）は、このように、昼夜を問わず「名前」で満ちていた。時には大声で、イタリア語独特の歌うような旋律に乗って町の大通りに響きわたり、時には小声で、本人には聞こえないようにあだ名を口に出して笑ったりする。他者に「名前」を付け、他者の「名前」を覚え、それで呼び掛けたり言及したりすることは、確かにどこの社会生活でも当り前とされていることだ。しかし、その体系を知らなければそこで社会生活を営むことが不可能になることが予想されるように、「名前」が当該文化社会のある重要な側面に係わる装置であることも忘れてはなら

ない。

我々人類学者がフィールドワークを始めるに当って、まず最初に行う作業の一つは調査地の人々の名と顔を覚えることである。それは、その後の参与観察のための基本的かつ不可欠な知識となる。誰が何某であるかを知らなければ、観察や情報収集は不正確にならざるを得ない。こうしてフィールドノートには様々な具体的人物・行動が蓄積され始め、それらは、当該文化社会を記述し理解しようと試みる人類学者によって、より抽象的な社会構造や世界観等を導き出すための資料となっていく。ところが、この時、その資料の具体性そのものは、その分析の確度を支えるという意味では重要性をもつものの、その結果においては二義的な存在に過ぎなくなる。

言い換えれば、これまで、全ての具体的人物の行為は社会構造に還元されて記述されてきた。例えば「アンジェリーナ」は、何よりもまずR町社会を構成する一個人であり、彼女の特異性は彼女の果たす社会的役割に因っていると見なされてきたのである。一方、分析の主眼を社会全体ではなく個人そのものに移すならば、「アンジェリーナ」に関する諸資料は文化的なselfについての分析を促す。この視点は、文化類型論・文化とパーソナリティ論という経緯を辿ってきた心理人類学の分野で、近年、新たに注目されてきている。即ち、従来用いられてきたself, individual, person等の分析概念が、実は西欧文化の概念範疇に捕らわれているという反省に基づいて、各文化毎のselfの構造を明らかにしようとする試みである［Rosaldo 1984:138］。しかし、この場合も求められるものは、より抽象化されたselfの構造であって、「アンジェリーナ」のもつ具体性は、当該文化のselfの亜型あるいは応用例とみなされるに留まるか、又は、文化を超えても人間は理解し合うことができるという、極めて安易な意味での普遍的な個人的内面の問題として処理されてしまう。結局、人類学者が調査地で巡り合う具体的な諸個人は、その研究過程において資料としての意味しか持たないのであろうか。故に、これらの「名前」を持つ人々を、その「具体性」そのままに分析・記述しようとする試みは無意味な徒労に過ぎず、それを文化社会理解の新たな地平を展望するものとして発展させるこ

とはできないのだろうか。

本稿の冒頭で触れた「名前」の問題の底流にあるのは、こうした問題意識である。確かに、「名前」の形成と適用のされ方は、一面では、これまでも他の視点で論じられてきた社会構造やself の文化的特徴の反映と見なすことができるかもしれない。実際、この側面からの「名前」の分析はこれまでにもいくつか成されてきた［Geertz 1973］。ところが「名前」は、個々人に付されているように見え、さらには社会的便宜からそのように用いられていても、個体としての個人を指示するばかりではない。例えば、冒頭の中年女性が呼び掛けたのは「アンジェリーナ」という人物であって、その本名であるアンジェラ・パチーニが意味する人物ではなく、勿論、無個性の個人でもなかった。この中年女性は「アンジェリーナ」という呼称を彼女に対して選ぶことによって、「アンジェリーナ」という人物を表現し、社会的に構築しているとも言えよう。このように「名前」とは、文化的なキャラクターを表面化している一装置でもあるのである。

ここで筆者の言うキャラクターとは、個々人が各々にもつ性格や特徴のことではなく、「人物」に関して彼等が共有している文化的なイメージ群である。故に、キャラクターと具体的個人とは別の次元の問題であり、キャラクターが、常に或る特定の個人に背負われているとは限らない。あるキャラクターは、ある個人に突出しているかもしれないが、人々が当該文化社会に普遍のものとして見いだすがゆえに、それを彼に託して意識化しているのかもしれない。時には、具体的な個人に託さずともキャラクターそのものに対応する常套句（例えば、「馬鹿者」「大食い」「女たらし」）が存在するかもしれないが、或る個人の「名前」から或るキャラクターを瞬時に理解し合うことも少なくない。

いずれにせよ、このように、彼等は自らの社会生活を、親族や友人等の範疇で把握しているだけでなく、キャラクターの体系に沿って自らの経験として範疇化し、命名し、秩序づけているという側面ももつのである。彼等にとっては、R町には「アンジェリーナ」がいて、その隣には「ペッピーナ」や「アンナ」が住み、「エルネスト」や「マリオ」

が歩き回っている。彼等の社会生活とは、お互いに「名前」を付けて呼び合うことであり、そこで展開されている諸社会関係とは、互いに何らかの「名前」を持つ人々の間の関係であるとも言い換えられ、そこには、文化的なキャラクターの体系が大きく関与しているのである。では、このキャラクターという視点から当該文化社会の本質を記述することはできないだろうか、これが本稿の主旨である。

本稿の分析対象は、筆者が一九八六―八七年に調査を行ったイタリア・ローマ近郊のR町である。[1] 現在、R町の人口は八〇〇〇人弱、戦後の社会変化の過程で、殆どがサラリーマン生活を送っているが、以前はぶどう栽培・ワイン作りおよび羊・牛の放牧を主生業としていた。近隣の町々には、農業の近代化に成功して、イタリアでも有数のワイン産地として名を馳せている地域もあるが、R町は敢えて棄農の方向を選び、ローマを中心とするベッドタウンの一つとして発展してきたのである。このため、過疎化を免れ、伝統的な町の形を残しながら、外部の人口を吸収して急激に拡大することになる。こうした町の動きは、戦後のイタリアの一町として極めて典型的なあり方の一つである。本稿では、この拡大化現象によって生まれた新たな社会問題はさておき、変化しつつも今だに伝統的な社会関係が息づいている町の側面に焦点を当てていく。

これまで、イタリア社会については、atomistic, amoral等の形容詞を用いて、その社会的な無規律性を強調する議論や、恩顧関係や友人関係等の二者間関係の発達を指摘してその特徴を分析するnon-group論的研究が多かった[宇田川一九八六、五二―三]。又、バンフィールド[BANFIELD 1958]のamoral familism論に代表されるように、極めて心理学的な視点からの彼等のパーソナリティに関する類型論も見られた。しかし、本稿はそのいずれの視点・立場も取らず、上記の問題意識に基づき、「名前」の問題を発端として、R町の人々に共通認識されているキャラクターの一端を明らかにしていくことを目的とする。具体的には、「ピラートPilato」という人物を取り上げて、まず「ピラート」というあだ名が、いかに文化的キャラクターと結びついた個人名称であるかを明らかにしていく。そして、彼

が「ピラート」と名付けられた様々な背景と、「ピラート」に表現されているイメージを再構成して対照させることによって、このあだ名の形成と適用の過程で鼓舞されるイメージの断片が、いかに彼等の社会生活の中で重要な意義を持つかを示唆していく。勿論、キャラクターという視点からR町社会、又はイタリア文化全体を論じようとするならば、「ピラート」のみを取り上げる本稿の試みは余りに不十分であろう。しかし、本稿は、今後その方向で研究を進めていく可能性を探るための準備段階であり、そして同時に、イタリア社会に限らず、社会記述一般についての新たなる展望を提示していきたい。

一　あだ名「ピラート」：R町の名称体系

「ピラート」は、本名をデルフィーノ Delfino（名）ルチアーニ Luciani（姓）といい現在四四歳、近隣の町の駅に勤務する鉄道員である。R町は、先述のように戦後激しい社会変化を被り、今日ではその町 *paese* としてのまとまりさえ危うくなっているが、彼は依然としてR町社会に深くコミットした生活をしている。頻繁に町中を動き回り、多くの祭りや催し事に係わって、常に話題に上る人物の一人であり、「ピラート」とは、そのような環境の中で彼に付けられたあだ名なのである。本稿の目的は、このあだ名が、デルフィーノという外延的個人以外に何を表しているかを明かにすることであるが、その為にはまず、R町社会での「名前」の付け方・呼び方、即ち、名称体系一般の中でのあだ名の意義を明確にしてく必要がある。そもそも、個人がいかなる社会的構築物として認知されているかを、あだ名を含めた、名称体系の次元で明らかにしておかなければならない。但し本稿では、個人が固有にもつ名称を対象とするため、親族名称のように他者との関係に依存して用いられる相対的な名称体系は論外とする。

姓 *cognome* と名 *nome*　まず、各人は、個人名称として姓と名を持つが、そのうち姓は、実生活において殆ど用いられることはない。他人の姓についての彼等の知識は極めて曖昧であり、姓と名の組合わせによって個々人を同定

するという認識枠はもっていないのである。例えば、デルフィーノ・ルチアーニという名・姓が「ピラート」を同定していると分かる者は殆どいないだろう。

確かに、姓は、基本的に、父親のそれを継承してから一生変わることはない。婚姻によって女性が夫の姓を自分の姓名に付加することはあっても、姓が変更することはないのである。A婦人（*Signora A*）という具合に、夫の姓Aでその妻を同定する方法は語法的には存在するが、町社会で実際に使用されることは皆無である。

しかしながら、このことは、姓の体系が父系血縁の関係・範疇を表徴しているということにはつながらない。例えば、R町で唯一、姓が単独で何らかの集団を指すかのように用いられている例にヴィンチ Vinci という姓があるが、これはヴィンチ姓全員、又はその一部親族集団を指すのではなく、ヴィンチ姓をもつ一人の大規模土地所有者とその家族を中心に、彼の近親を含む範囲を曖昧に指示しているにすぎない。この場合、ヴィンチ姓は、この中心人物の政治的力を彼の親族との関係に換喩する表現方法として用いられていると考えられる。そもそも、イタリア社会の親族関係は、具体的な相互行為の積み重ねを基盤として、状況・文脈に応じて自己中心的に認知・構築されるものである［宇田川　一九八六、五六］ため、姓は、個々人を或る親族との関係という形で認知する一装置であっても、或るアプリオリな親族集団に個々人を分類するという範疇的な標識ではないのである。この点についてはあだ名も同じ性格を持ち、むしろ後述のように、あだ名の方がより明解に個々人を親族として関係付けることができる。ここに、姓の機能の低さが起因しているのかもしれない。実際、或る姓が姓であることを意識されずに、又は誤解されて、あだ名と見なされている例も少なくない。

これに対して名は、個人に対する呼称として頻繁に用いられている。但し、一般に名と言われるものは、出生名ではないことに注意しなければならない。慣習的には、誕生時に三つの名が個人名として与えられ、その内の一つが洗礼名となり、同時に彼の日常的な呼び名としても用いられる。この呼び名が、いわゆる彼の名と見なされているもの

なのである。勿論、この慣習は厳密な規則ではなく、出生名自体が一つの名で構成されていたり、呼び名が二つの名の合体であったり、洗礼名と呼び名が一致しなかったりすることも多い。

ところで、こうした多様性にもかかわらず、名の体系にはある重要な文化的意義が含まれている。まず、命名時に選ばれる三つの名は、親の純粋な好みによることもあるが、誕生日の聖人名や出生順位に因んだものの他に、非常にしばしば近親や洗礼親の名が組み込まれる。特に祖父母の名を個人名の一部として持たない者は少ないだろう。デルフィーノについても、彼の出生名デルフィーノ＝アントニオ＝バレリオの内、アントニオは彼の母方の祖父の名である。つまり、この複数の名の組み合せという装置は、好むと好まざるに拘わらず、各人は或る関係の中に生まれついているという認識の表現なのである。又、その内少なくとも一つが洗礼名になるということは、神との関係が「人間」規定の一要素であることを示しているが、さらにこれらの内から呼び名が選択されるということは、神および或る人々との関係の中で誕生した彼を、その既成の関係世界に留めるだけでなく、より多くの人々から「呼ばれる」世界に引っ張り出すことである。個々人が、彼の誕生時の基盤とは一応切り離されて、新たに存在を開始することを象徴的に示しているのである。

そればかりではない。こうして選択された呼び名さえ、実際に「呼ばれる」過程で縮小辞を伴ったりして変形し易い。例えば、ルイジの名を持つ者の内、或る者は「ルイジーノ」、或る者は「ジーノ」と呼び習わされている。つまり、ある人物の呼び名が選択され、時には若干の変更を受けながら確定するというこの過程は、「呼ばれる」ことによって、人は初めて社会的個として成立することを示唆している。この呼び名が指示するものこそ、「呼び合う」場、即ち社会生活の場における基本的な単位なのであり、或る者は、その出生名ルイジ＝フランチェスコ＝アルベルトの指示する人物ではなく、その呼び名「ジーノ」として社会的に存在しているのである。故に、呼ばれなければその名が忘れられるだけでなく、彼の存在は社会的にゼロに等しくなる。

このように、名の体系は、単に個人を他者と区別されるものとして指示する固有名称ではなく、形態的に大きな柔軟性をもち、彼を社会的存在として認知し表現する装置としても機能している。ここには、序節で述べたキャラクター的な視点が彼等の社会生活において大きな意味をもっていることが示唆されていよう。そしてこの側面は、後天的に各自の社会生活の過程で形成されるあだ名に最も如実に現れているのである。

あだ名 *soprannome* 以上のように、姓が殆ど使われないR町社会では、名だけでは、体面的な呼び掛けの場はともかく、或る個人を同定する際には混乱が起こり易い。それを補うために用いられるのがあだ名であり、彼等自身も「分かり易いように」あだ名を使うと言う。しかし、しばしば「皆、各々にあだ名を持っている *Ognuno ce l'ha il suo soprannome.*」と言われる程に重要視されているあだ名の意義はそこに留まるものではない。

R町で見られるあだ名は、数・種類ともに非常に多い。中には、その言葉としての意味は理解できるが由来の分からないものや、言葉としても意味不明のものも少なくないが、その大半は、主に本人やその近親者の職業・出身地・容姿・性格・事件等に因んでいる。例えば、「Maria la tabaccaia（タバコ屋のマリア）「Alberto camposantaio（墓地管理人のアルベルト）」であり、南イタリアのカラブリア地方出身の某氏は「Calabrese（カラブリア人）」とあだ名されている。又、「Nasone（大きな鼻）」、「Cipollone（大きな玉葱：大きな頭を意味する）」、「Peppe bellezza（美しいペッペ：彼の醜さをからかったもの）」等は身体的特徴を表現したものだが、「Ciciumucca（チーチュームッカ：彼の喋り方の特徴を擬音化したもの）」、「Maria di sciabè（無味乾燥な性格のマリア：*sciabo*［味のない］という形容詞に由来）」や、子供の頃ロバを盗んで見つかったことから「Somaro（ロバ）」というあだ名をもつ者もいる。

本稿で取り上げている「ピラート」は、デルフィーノ当人の性格に由来したあだ名である。そもそもピラートとは、キリストの処刑を許可したユダヤ総督の名で、聖書によれば、彼は個人的にはイエスの処刑を望まなかったので、その許可後、自分はこれ以上係わらないという意味で手を洗った。この故事から、一般に「手を洗う」とは「ある問題

から手を引く」ことを意味する。デルフィーノは、様々な揉め事に係わっては意見を言うものの、それが思い通りにならないのを見るや即座に「俺は手を洗う」と言って、パンパンと手を叩く身振りを頻繁に行う癖があり、これが彼のあだ名の由来譚とされているのである。

ところで、これまでもあだ名については、特に地中海ヨーロッパ社会の事例に基づいた研究がいくつかなされてきた［GILMORE 1982：686］。例えば、あだ名がゴシップの過程で形成され易いという点に着目して、コミュニティの社会制御装置と見なしたもの、あだ名が継承されるという側面を分析して、ある集団を統合する機能をもつことを指摘したもの、あるいは、コミュニティ内の者が全員、あだ名を持ち、互いにそれで呼び合うということ自体がコミュニティ全体の境界維持機能を果たしていると主張するもの等である。以上のことは、確かにR町のあだ名についても言える。しかし、それらはアプリオリにあだ名を社会構造の反映として観察しているために、極めて一面的な分析であり、名称体系としてのあだ名の実態に対してさえ十分な叙述が行われていない。

例えば、R町社会のあだ名は、独立的な制度として機能しているのではなく、「名前」の諸体系の内の一つであり、名とも密接な関連を持っている。実際、彼等自身のあだ名の定義は曖昧である。例えば「Maria la tabaccaia」の場合、極めて狭い意味では「la tabaccaia」だけが Maria のあだ名であるが、しばしば、この名称全体が彼女のあだ名であると言われる。「Antonuccio（Antonio に蔑称辞—uccio を付けたもの）」の例のように、個人名自体に接尾辞が付加されてあだ名として通用している場合も少なくない。又、あだ名は各人に一つとは限らないという事実もある。あだ名は、その由来から、親・配偶者等の近親のそれに因んで付けられたものと当人に新たに付けられたものの二つに大別できるが、このことから想像されるように、各人は各々あだ名を持っているものの、それが一生、唯一固定的なのではなく、変化したり、複数のあだ名をもつことも多いのである。例えば、デルフィーノも以前には、父親の名に因んだ「ニコラのデルフィーノ」というあだ名を持ち、現在でもしばしばそれで指示されている。

つまり、あだ名は、社会構造を補佐するものとしてではなく、他者を社会的に表現する「名前」一般の一形態として総合的に分析していかなければならないのである。では、以降では、具体的にデルフィーノのあだ名がどのように形成されてきたかを記述しながら、あだ名とは何を表現する名称体系であるのかについて考察していくことにしよう。

先述のようにデルフィーノは、「ピラート」というあだ名が普及する以前に、「ニコラ（父の名）のデルフィーノ Delfino di Nicola」又は、「アントヌッチョ［祖父のあだ名］のデルフィーノ Delfino di Antonuccio」というあだ名を持っていた。このように近親者の名やあだ名に因んだあだ名は、R町に広く見られ、これは、ある個人を彼の親族との関係を用いて表徴している名称であると言うことができる。なぜ、例えば友人や近隣との関係ではなく、親族との関係に限って個人を同定・表現できるのかについては、そこに何らかの集団的な親族範疇が認識されているからではなく、親族概念の文化的意味に関わる問題である。本稿ではそれについて詳述する余裕はないが、端的に述べれば、彼等の文化システムにおいては、自分の「肉」を得たところの親と、「性交」によって一体化している配偶者とは、彼自身の或る側面を代表し、彼の換喩に成り得る存在と見なされているのである［宇田川　一九八九］。実際、親族の内でも特に親や配偶者の名があだ名に組み入れられることが多い。そして、殆どの人々には、この種のあだ名が付けられており、特に若い頃、彼の行動範囲が狭く彼自身の特性がそれ程知れ渡っていない時期には、それで指示される。

ところが、どの親族との関係がこの種のあだ名の形成に関与するのかについては、しばしば想像されるように親族関係としての規定はなく、[2] それ以外の要素が関与している。その一つは、その親族の社会的な知名度及び当人との関係の深さである。例えばデルフィーノのあだ名の場合、彼の父ニコラは、冗談好きで人当りのよい人物として、一方、母方の祖父アントヌッチョも、非常に陰険な人物として有名であった。又、今ではアントヌッチョをデルフィーノのあだ名として言及する者は殆どいないが、それは、ニコラがアントヌッチョよりも知名度が高いというだけでなく、デルフィーノがニコラに似た性格を持ち、彼が現在組織している巡礼旅行の企画も父から引き継いだという事実によ

ると考えられる。デルフィーノの社会的存在は、ニコラとの関係という形で認識・表象されているのである。これに対して、彼の妹アンナは「今だにアントヌッチョのアンナ」と言われることがあるが、その場合には、彼女の性格が良くないことが含意されている。

もう一つは、あだ名が用いられる場、即ちそれを用いる者と用いられる状況である。例えば、デルフィーノのあだ名としては、現在「ピラート」が最も普及しているが、女性達は「ニコラのデルフィーノ」の方を好んで用いているという事実がある。R町社会では、女性と男性の生活圏が明確に分離している。後に述べるように「ピラート」という名称は、主にデルフィーノの男性達との付き合いの中から生まれたため、その形成に直接に参与することの少なかった女性達にとってのデルフィーノとは、むしろ「ニコラのデルフィーノ」によって表徴される人物であると言えよう。さらに彼女達の会話の中では、「マリアのデルフィーノ」という彼の母マリアに因んだ言い方さえ何度か見られた。これは便宜的な言い方であって、あだ名ではないが、あだ名の原型が、それを用いる者が対象に対して想起するイメージにあることを示唆している。

つまり、あだ名の体系とは、誰をどのように同定するかではなく、どのように表現するかについての文化装置なのであり、このことはさらに、あだ名を形成して用いる側の問題、即ち、彼等の共有する「人物」観の問題にもつながってゆく。続けてデルフィーノの例を見ていこう。

「ピラート」が彼のあだ名としてR町中に定着したのは最近のことであるが、彼の友人達の間ではそれ以前からこの「名前」が使われていた。このように、個人に新たに付けられるあだ名は、一般に、彼が具体的に社会的行為を行う場で、彼の具体的な相互行為の相手である友人や知り合いによって付けられた「名前」を発端としている。しかし、これらの「名前」が全てあだ名になるのではない。確かに、あだ名になる為の条件として、一つには当人の社会的活動の範囲、即ち知名度の高さが考えられる。例えば、「ピラート」の由来譚は先述のとおりであるが、この時、しば

しば「彼が町議会議員だった時」という補足が入る。つまり、彼自身がその活動や特徴によって町全体に知られた存在になることが必要なのだが、これは、あだ名が個々人を同定する機能を持つ限り当然のことである。

ここで先の議論に戻り、「名前」一般が、個人に対する社会的認知・表現の言語化である点を積極的に考慮する必要があるだろう。彼等があだ名という形で個々人の特性を特性として把握・抽出する際には、「人物」に関する何らかの文化的なイメージ群、即ちキャラクター群が共有されていると考えられるのである。様々な社会的出来事はそのままの形で彼等に認知されているのではなく、或る種のイディオムを通して初めて「彼等の現実」として姿を現す。そして、この文化的なイディオムの一つとしてキャラクターの体系があり、あだ名とは、彼等によって経験され具象化されたキャラクターのストックであるとも言えるのである。例えば、「ピラート」がデルフィーノのあだ名と見なされるようになったのは、単にデルフィーノがR町で広く知られていたからではなく、「ピラート」を通して喚起されるイメージが、彼等の「人物」や「社会」認識にとって決定的な意味を持っているからである。故に、それに値すると見なされなければ、かなり普及している「名前」でも、当人のあだ名にはならず、彼のあだ名は彼の親族関係に因んだ形のままとなる。

逆に、或るあだ名とキャラクターの結び付きが極めて強い場合には、多くのあだ名が孫の世代あたりで忘れられる一方で、何世代を経ても用い続けられる。その一例「パッツォーニ Pazzoni」というあだ名は、例えば「パッツォーニのアルド」のように用いられているが、それは、「パッツォーニ」が誰を起源としたあだ名であるか定かではないため、アルドが母親からこのあだ名を受けたことは知られていても、単にこの親族関係によってアルドを同定している名称ではない。確かに「パッツォーニ」とは、かつては或る人物を指示していたに違いないが、今や、愚かしいまでに自分の名誉に固執して気違いじみた振舞をするキャラクターを意味し、「パッツォーニのアルド」とはアルドが同様の性質であることを表しているのである。さらに、この種のあだ名はしばしば *razza* という言葉とともに使われ

る。*razza*とは一般に、人種・種族を意味するが、「*razza* di Pazzoni」のように用いられると「パッツォーニの一族」という意味になる。この用法は、集団的な親族範疇が存在することを示唆しているのではなく、当該人物と「パッツォーニ」との親族関係、より正確には、上記のようにキャラクターの関係・由来を表したものである。「パッツォーニ」の誰かと何らかの親族関係を持つ者が、通常は他のあだ名をもっていても、時に気違いじみた行動をすれば、「あいつはパッツォーニの一族だから」と評される。もはやここでは、「パッツォーニ」とはキャラクター名称でしかない。

以上から、あだ名とは、人々の「社会」や「人物」に対する解釈枠の一つであるキャラクターと密接な関連があることが分かった。あだ名をつけるという行為自体に、彼等がキャラクター的な視点を持つことがうかがえるのである。「ピラート」がデルフィーノのあだ名として選ばれたのは、デルフィーノ個人に帰する問題ではなく、R町の人々の持つ「人物」像の問題である。それでは、「ピラート」とは具体的に何を表現しているのであろうか。この点を明らかにするには、まず、デルフィーノ自身の社会生活を知る必要がある。確かに「ピラート」とはデルフィーノそのものを指示しているものではないが、彼がR町社会でいかに行動してきたかは、彼の「名前」の生まれた背景について何らかの示唆を与えてくれると思われるからである。

二　デルフィーノの社会生活

デルフィーノは、隣のM町出身の妻と三人の子供と共に暮らしているが、R町における彼の特性は、この家族生活にあるのではなく、彼の友人達との付き合いの側面にある。例えば彼の仕事について見てみよう。彼は三一歳で鉄道員という定職を得るまでは、父親とともに鍛冶師として働いていた。このため、現在でも駅勤務の傍ら、友人達の依頼を受ければ、副業として鉄鋼関係の仕事を行っている。しかも、R町ではこの技術を持つ者は僅かしかいないため、デルフィーノは、臨時の日雇い仕事とはいうものの多くの建築関係者（彼の友人でもある）と契約を結び、休みもとら

ず働いている。このことからも分かるように、彼は豊富な友人関係に囲まれており、彼自身も常日頃からそれを活性化し拡大しようとする行動様式をとっている。

デルフィーノは、通常、仕事から戻るとすぐに外出して近くの広場に行き、バールや床屋で時間を過ごす。バールとは、コーヒーやアルコール類等、簡単な飲み物の置いてある狭い店で、座れる空間はないが、男達はカウンターや入口にたたずみ、前を通りかかる友人達を捕まえては、飲み物をおごり合い、話しに花を咲かせている。それらは、言うならば、R町の男性が日常的に集まる社交の場であり、様々な情報交換（上記の求職・求人の情報も含む）や噂話、又は何らかの組織や企画が発案され、会合が持たれ、様々な取引・関係が展開されているのである。いくつかのバールにはcredit associationも組織されており、デルフィーノもその内の一つに加入している。彼等はそこで友人達と立話をした後、適当な頃合いを見計らってその裏手辺りにある居酒屋に連れだって入り、しばしば夕食もそこですませてしまう。時には、友人のブドウ酒倉に集まって会食を行うこともある。デルフィーノも自分の菜園に炊事可能な小屋を持ち、彼の友人達の会食の場の一つになっている。こうして、R町の人々が彼を評する際には必ず「*bere troppo*（飲み過ぎ）」「*ubriaco*（酔っぱらい）」と言う程に、デルフィーノは常にブドウ酒やアルコール類のある場、即ち男友達との付き合いの場に入り浸っているのである。

又、これらの場は、祭りを組織するための企画や下工作、つまり意見交換・人員のリクルート・情報伝達等の舞台にもなっている。デルフィーノもR町で行われる多くの祭りに係わっており、具体的には、二つの信者会に加入し、他の聖人祭でも主要人物の一人である。もっとも、どの祭りの組織においても、長年にわたってその役員を務めるほど熱心で固定的な中心人物であるとは言えないが、その企画の過程で様々な発言をし、実際にもいくつかの仕事を分担して動き回っている。

デルフィーノがこれらの組織に参加している理由について、彼自身は「（祭りの中心人物達と）友人だから」と語る。

彼は、中心人物によってリクルートされた、言わば二次的な構成員であり、故に、これらの祭りは彼のイニシアティブを全面的に発揮しうるものではない。これに対して、彼が名実ともに中心になって組織しているのは、巡礼旅行である。これは日帰りのバス旅行の企画であり、五月中旬の「聖愛のマドンナ」への巡礼を始めとして年に三回程実施される。このような旅行は、巡礼以外のものも含めて、R町では彼の他に数人が自発的に組織しているが、その中でもデルフィーノの旅行は有名であり、特に「聖愛のマドンナ」の巡礼は彼のみが行う。しかも、この時は単に巡礼地に赴くだけでなく、町の教区教会に安置されている「聖愛のマドンナ」像も運ばれ、教会の主司祭が同行してミサを行い、あたかも一信者会の様相を呈する。ゆえに彼の立場は、信者会の会長に相当すると見なすこともできよう。尚、主司祭が同行する巡礼旅行はこれだけである。

さらに彼は、イタリア共和党（PRI）のR町支部の副支部長も務めており、町政に対して積極的に発言している。PRIは現在のR町では第六党、二〜三％の得票率を有する政党だが、前回の町議会議員選挙で一議席を獲得した時には、デルフィーノが議員として町政に参加した。

以上が、デルフィーノが係わっている町の組織である。もっとも、これらのように比較的継続性がある組織体の他に、目的がより個人的なものに限定された一回性の組織（action set）も含めると、彼はR町の至るところに登場する。例えば、彼は友人二人と組んで狩猟犬の共同飼育をしている。彼が狩猟を趣味にしていることはR町でもよく知られており、狩猟仲間の中心的な存在でもある。又、ある聖人祭の山車の競争で、友人達とチームを作って参加したり、小中学校の同窓会の幹事を引き受けたり、自分の家屋を建てる際に友人の手伝いを集めたり、得意の喉を生かして、友人達と「音楽隊」と称して知り合いの結婚式に歌と音楽のサービスに駆けつけたりと、枚挙に暇がない。

以上はデルフィーノの社会生活についてのスケッチである。それは、「ピラート」についての叙述というよりは、

むしろ、デルフィーノという個体としての個人に注目した記述であった。これによれば、彼は、非常に錯綜した具体的な相互行為の積み重ねの中で生活していることが明らかであるが、そのどこに「ピラート」としての特徴があるのだろうか。

まず、R町社会におけるデルフィーノの特徴をまとめてみれば、彼の町における社会的地位は、何らかの明確な資格に基づく社会関係・範疇と係わりがあるのではなく、彼個人の具体的な活動によって獲得されたものであることに気付く。これまで報告されたイタリアの諸コミュニティと同様、R町社会にも、明確で安定的な社会関係・組織を見いだすことはできない。確かに上記のように、祭りの組織や政党組織があるが、その加入資格は特別なものではなく、しかも、デルフィーノの巡礼旅行の企画のように、個人的に新たな組織を作ることも可能である。このように積極的に他者に働きかけて協力者として巻き込み、何らかの企画や事業を実行しようとする行為は *organizzare*（組織する）と表現され、R町社会は、この *organizzare* によって具体化した諸組織によって構成されている、しかし、*organizzare* という行為自体、極めて具体的個人に依存した行為であるため、各々の組織は安定性が低く、町全体の構成は、一見、atomisticにさえ見えるのである。

デルフィーノはこのような社会的特質を積極的に活用し、友人関係 *amicizia* を重要視することによって、R町において重要な位置を占めるようになったのである。R町社会では、仕事を見つけるにも、何らかの制度を利用するにも、社会生活のあらゆる側面は他者との個人的かつ具体的な接触、即ち *amicizia* によって展開されている。空間的にも、こうした友人達との接触の場が設置され、活用されていることは先にも述べた。ところで、*amicizia* とは、各人が個々に形成・維持し、調整・操作していかなければならない関係であって、何らかの資格や権利・義務によって規定されているものではない。しかし、無論、何らかの規律がないわけではなく、具体的な相互行為の場でどちらが相手を巻き込んで有利に立つことができるか、それは社会的にどう判定されるのかについて彼等は敏感に反応し、そ

れが彼等の行動様式を特徴づけている。例えば、常にR町中を *stare in giro*（歩き回る）して、なるべく多くの人々と接触し、できれば何らかの *organizzare* を試みながら、自分の存在・能力を他に対して開陳・主張して、自らの社会的位置を構築しようとする。常に人々の目に触れるところに居るだけでも、「一廉の人物になった *diventa qualcuno*」と言われるのである。

以上から、デルフィーノは、*amicizia* を積極的に操作する人物として、まさに町社会の一断面を代表していると言うこともできよう。そして、この点が「ピラート」という彼のあだ名の形成に深く関与していることは間違いない。しかし、本節の記述は「ピラート」という名称が町全体に普及した背景を明らかにしてはいても、その名前自体が具体的に何を表徴しているのかについては十分な回答を与えてはいない。つまり、R町の人々が、自らの社会生活を説明し意味づける際に有効な「人物」イメージの一つとして、いかにデルフィーノの行動を範疇化しているのか、キャラクターの具象化としての「ピラート」とは何なのかという問題である。

三　「ピラート」とは？

R町の人々は、「ピラート」という言葉に様々な反応をする。含み笑いをしたり、彼の歩き方や口調を真似たり、あるいは、おもむろに彼の逸話を話し始めたりと、デルフィーノ当人を指示する以上の何かが彼等の間に喚起されるのである。では、「ピラート」に関して町の人々が筆者に語ってくれた事柄を基にして、彼等のイメージする「ピラート」像についての習作を試みてみよう。

「ピラート」がどこにいるか、それは誰もが知っていることだ。彼を彼の家に捜しに行くような者は余程のモノ知らずに違いない。彼に会いたければ、あの広場に行きさえすればよい。しかし、実際には、彼を捜す者は殆どいない。

彼は、我々が捜す前に、いつも既に我々の前に居るからだ。(二節参照。彼がいつも町の中心広場の一つに出向いており、町の様々な催し事に携わっていることを彼等は熟知している。)

彼は、中肉中背、敏捷そうな身体をもち、細めの鋭い目で、眉根を若干寄せてイライラしたように他人を視る。一度見たならば、忘れられない部類の人物であるし、そんなことは彼自身、百も承知だ。彼は常に清潔を心がけ(彼の会話の中には、何度シャワーを浴びたばかりだという報告が入ることか)、服装、特にその配色に気を使い、そのしなやかな身体(幸運にも中年太りを免れている彼は、体質以上に自分の努力の賜物だと主張しているのだ)が最も見映えのするように、広場の中でも目立つ場所に身を置き、一挙手一投足に注意を払っている。さらに身体を動かすことについても、彼は一目おかれる存在でなければならない。若い頃、歌手になろうかと思った程の美声を持ち、ダンスを踊らせたら、そのステップのアクロバティックな軽さは一見の価値がある。当然、女に対する関心だって人一倍だ。今、彼に愛人がいるかどうかは、誰だってそんなことは公言しないし、誰もがしていることだから愚問であろう。だけど、ああ、かわいそうなことに、彼はタランテラという毒蜘蛛にやられてしまった。その毒がどれ程凄いかは彼の面を見れば分かるだろう。伊達男も今では…。でも、唯一の救いはその前に美人の妻を手にいれたことだ。(と、男達は「ピラート」の顔の表情や歩き方等をまねる。)

しかし、「ピラート」と言えば、絶対に忘れてはならないのはアルコールだ。彼は、昼間はバール、夕方からは居酒屋に入り浸りで、一日中アルコールと切れることはない。真夜中に酔っぱらって大声で歌っている者がいれば「ピラート」に間違いないし、深夜遅くに他人の家の戸を乱暴に叩いて起こし、あまつさえ、夜食のスパゲッティを作らせたことも一度や二度ではない。彼の家の前に住む老女は、毎晩、彼がふらふらして帰宅したのを窓から確認してからベッドに入り、翌朝、夕べも「ピラート」が酔っぱらっていたと吹聴しながら一日の生活を開始する。但し、彼をただの「酔っぱらい」と一緒にされては困る。彼は何よりもまず「ピラート」なのであり、酒を飲むのも、或る使命

のためであり、ただ飲んでいるだけではないのだ。

「ピラート」は告発の人である。いつも彼は、世の中は不正に満ち、人々は自分の利益のためだけに動いていると非難する。言葉でだけでなく、その敏捷そうな身体の線も、神経質そうな視線も、常に煙草の箱をまさぐっている手も、その告発を忘れたことはない。彼は言う。「何故、町に活気がなくなったのか考えてみるがいい。町長は何をしている。政党は何をしている。どいつもこいつも、学校もろくに出ていないのに、背広なぞ着てふんぞりかえって歩いている。あいつらは、政治なんて何もわかってやしない。金儲けの仕方を知っているだけだ。おまえ達、このままでいいのか。」

「ピラート」は、ただ喋っているだけではない。彼は実行するし、実行する者であることを自認している。単なるおしゃべり *chiacchierone* や安請け合い *facilone* の輩ではないのだ。ある祭りの信者会の会計に不正があると察せられれば、次の一年間の運営を自発的に引き受けるし、町議会議員として町政に参画した時期もある（二節参照）。「他人のために、町のために働くとはどういうことか、俺が見せてやろうではないか。」

しかも「ピラート」は言動一致の人である。彼はその間、何の実績もあげなかったということをやり遂げた。「俺のおかげで不正に富んだ者がいたか。」しかし、その傍らで、身内を富ます者がいて、確実に富んだ者がいた。どんなものであれ、無よりも有の方が人を引きつける。誰も彼の「偉業」を見ようとしないことを知った彼は、人々の無理解ぶりに呆れて、パンパンと手を洗った。政治なんて「自分には係わりのないことさ。」

しかし、「ピラート」は学び成長する人でもある。彼は言う。「確かに、打算だけで動く人間がこの世の中にはいるし、残念ながら、自分の友人の中にも何人かいたことがよく分かった。今ではこれまでの経験のおかげで、その見分けがつくようにもなった。だが、友情とは打算だけではないのだ。見るがいい、わが友人達を！彼等は俺が困っている時には無私になって助けてくれる。勿論、俺も彼等にそうしている。自分が無私になれば、相手だって無私になる

ということにこそ、友情の真髄があるのだ。」

だから、「ピラート」は実行の人であることを止めない。居酒屋に入り浸り、告発を続け、自分が良き友人たらんことを見せ、一人でも自分の良き友人にならんことを納得させることが彼の使命なのだ。「もう、自分のことを考える（*fa i fatti suoi*）時期ではないか」という家族の忠告にも耳を貸さない。「みんなが自分のことだけを考え、恩顧や報酬が無ければ動こうともしないなら、誰かが世の中は金だけではないことを見せてやらなければならない。それが俺の仕事なのだ。」

「ピラート」は居酒屋に多くの友人をもっている。彼等は、ある時は、彼の家の建築に力を貸す。なぜなら、「ピラート」が必ず返酬する人物であることを知っているからだ。時には、彼の祭り等の企画にも手を貸す。なぜなら「ピラート」がすぐに飽きる人物であると知っているからだ。このように友人達は、「ピラート」が、たとえ他に益を与えなくとも、決して害を与えない人物であることを熟知している。彼等は言う。「『ピラート』は口うるさいが、悪い *cattivo* 人間ではないし、悪賢く *furbo* もなく、どちらかと言えば御人好し *frescone* であり、総じて善い *buono* 人間だ。」「そもそも『ピラート（ユダヤ総督にひっかけて）』とは、悪くも善くもないのさ。」だから、「ピラート」が小難しい顔をして、時にはテーブルを叩きながら喋り始めるのを、彼の友人達は相槌を打ちながら聞いている。もし、彼があまりにも激し過ぎれば、なだめようと穏やかな言葉をかけるし、彼の使命が一段落したことを知れば、ぶどう酒を新たにつぎ交わして乾杯をする。そして、談笑が途切れていつの間にか歌になれば、「ピラート」に歌をせがみ、彼の回りを取り囲む。こうして今日も過ぎていくのである。

以上の「ピラート」についての描写は、今だ習作の域をでないとはいえ、二節のデルフィーノについての描写とは大きく異なっていることは明らかである。一節で詳述したように、「ピラート」という名称は、外延的な個体として

のデルフィーノの表現ではない。実際、「ピラート」に関する逸話や物まねが、本当にデルフィーノに当てはまるか否かは問題にされていないし、デルフィーノについての全ての逸話が「ピラート」という名称の下に語られているわけでもない。例えば、彼が若い頃、頻繁に教会通いをしていたことは有名だが、それは「ニコラのデルフィーノ」（時にはマリアのデルフィーノ」）の話として語られるし、彼が父親から引き継いだ巡礼旅行の企画を続けていることに対しても同様である。勿論、これらの話の中でも時には「ピラート」として言及されるが、その場合には「ピラート」にそぐわないという意味の笑いが添えられる。「ピラート」とは、デルフィーノという具体的な個人から離れた、彼等のイメージによる構築物であり、彼等が社会生活の中で「人物」を認知する際の具体的なイディオムの一つになっているのである。

もっとも、以上の叙述は、筆者の思惟的な創作に過ぎず、筆者自身のイメージを、R町の人々のイメージであると迂闊にも誤解しているだけだという批判もあるに違いない。しかし、この問題は、文化の翻訳の問題に係わるので、詳しくは稿を改めて論じなければならないだろう。故に以降では、この記述自体の判定はさて置くとして、「ピラート」を通して明かにされたキャラクターが、彼等の社会生活の中のいかなる次元でいかなる意味を持つかを考察しながら、社会記述の一つの方法としてキャラクター分析の可能性を探っていくことにする。

四　キャラクター分析に向けて

これまでの人類学的研究において、キャラクターは資料的意義しか認められてこなかった。それは、たとえ分析対象とされても、その構成要素を分析・抽出し、その関連を知ることによって、より抽象化された社会範疇・概念体系を導き出すことが主眼だったのである。例えば、上述の「ピラート」についても、そのイメージを解体して、イタリア社会における対人関係のあり方に還元して論ずることもできよう。二節でも述べたように、デルフィーノは友人関

係 *amicizia* を豊かに発達させている人物であり、彼のその個人的特徴が「ピラート」という名称に凝縮され、彼等の *amicizia* 概念の一端を具体化しているという見方である。しかし、それは前節にみるように、単に *amicizia* についての形態的な例証ではなく、自己の身体の扱い方や感情の表出の仕方等と密接に関連して描かれている。「ピラート」とは、対人関係の一つのあり方が、身体的な特徴・神経質な性格・自己の正当性に対する信念等と絡み合っている総体に与えられた名称なのであり、彼等は、このような総体の中でこそ、*amicizia* を認識しているのである。

このことは、単にキャラクター分析の可能性を探るだけでなく、社会記述一般について再考しなければならないことを我々に示唆している。これまでの文化社会の理解についての研究史を振り返ってみると、まず、経験的事実の詳細な観察と記述から社会構造を抽出しようとする構造＝機能主義的な方法を上げることができる。この分析方法は、しばしば形骸的な形態論に陥り易い点について何度も批判を受けており、近年では、ギアッ Geertz が解釈学的な視点を取り入れて、当該社会の人々がそれを意味あるものと見なしている概念構造こそを明らかにしなければならないと主張している。しかし、いずれにせよ、社会構造・概念体系・世界観等を追求することが、当該文化社会を理解するための中心的課題であるとされてきた。勿論、本稿でも、それを否定するつもりはない。それは適切な分析を経れば、その文化社会の本質を抽出したものとして提示することができよう。しかしその場合でも、それは、あくまでも抽象化の産物であって、彼等の社会生活の中にそのままの形で認識されているものではない点に注意しなければならない。このことを失念してしまうと、その分析結果は極めて狭義の学問的な意味に留まってしまう。

例えば、先述のように *amicizia* の概念は、彼等にとっては「ピラート」や「アンジェリーナ」との関係の中でしか認識されていない。それらの具体的経験がたとえ *amicizia* という言葉で語られ、その重要性が主張されようとも、*amicizia* とは余りにも抽象度の高い言葉であって、彼等はそれによって諸経験を直接的に解釈しているわけではないのである。彼等は、むしろ逆に、種々積み重ねられた経験をあだ名等の様々な装置によって抽象化する過程で、

amicizia を断片的に随時浮かび上がらせている。故に、概念体系として学問的に抽出された *amicizia* には、彼等の社会生活の「現実」そのものは描かれていない。

これに対して、本稿で着目したキャラクター分析は、この「現実」のレベルに分析視座を置くものである。即ち、従来のいわゆる社会構造や概念体系の分析はさて置き、彼等自身が自らの諸経験に一貫した体系を与えているプロセス自体を記述しようとする意図をもつ。確かに、従来の構造分析に従って「ピラート」というあだ名から *amicizia* 概念の一端を抽出することもできよう。しかし、「ピラート」というあだ名の意義とは、それ自体が構成的に何を反映しているのかではなく、それが彼等の「現実」の社会生活を説明する際に意味を持つ役柄の一つとして意識されているという点にあり、これこそがキャラクター分析の視点なのである。

例えば、彼等は、自ら社会を無個性の個人の集団ではなく、「ピラート」や「アンジェリーナ」等から成ると認識しているという一面をもつ。この時、彼等にとって「現実」社会に生活している人々とは、当該文化社会に共有されているキャラクター体系によって解釈され秩序づけられた「人物」達である。確かに、人は、個別に肉体をもっているという意味では、明確な輪郭を持つ個体であるが、それが文化社会的にも意義のある単位であるとは言えない。このことは、三節の「ピラート」と二節のデルフィーノに関する記述を比較してみると明かになる。二節では、既に、個人を社会の構成単位・社会的役割の複合体と見なす視点が存在しているため、デルフィーノの行動は全て社会的範疇に沿って観察・記述されていた。しかしながら、そこに描き出されたデルフィーノが、R町社会で認識されている彼かどうかについては一顧だにされていない。実際、R町の人々の間では、デルフィーノなる人物の存在は認識されておらず、彼等にとって意味のある存在とは「ピラート」であり、さらには「ニコラのデルフィーノ」や「アントヌッチョのデルフィーノ」なのである。このように、彼等の社会生活においては、個体としての個人が分割されて認知されていたり、あるいは逆に、あだ名を付けられずに、その存在そのものが認知されない場合も少なくない。

つまり、彼等は、様々な具体的行為や具体的個人を、社会範疇や関係に帰するものとして観察し秩序付けているだけでなく、キャラクターに沿って解釈・分類し名称を与えていることが理解されよう。実際の社会生活では、自らの経験的事実をキャラクター体系に沿って読み取って構築していくという側面があるのである。このことは、彼等の「現実」社会とは、「ピラート」の逸話のように、いくつかのキャラクターを割り当てられた「人物」達によって展開されるストーリー、あるいは断片的なストーリー集という形で認識されていることを意味する。又、そのキャラクターがそれ自身の鮮明な具体性を失えば、「馬鹿者」のように「人物」一般の性格を表す常套句として、彼等の「人物」認識に関するイディオムの一角を構成することになる。いずれにせよ、キャラクター体系は、彼等が自らの社会生活を語る際の解釈装置の一つであり、故にキャラクター分析とはそれによって構築され展開している社会生活の側面(social process as theater と言い替えることもできる)を明らかにすることによって、当該文化社会の特徴を描き出すことなのである。

以上から、キャラクター分析は、社会記述の一方法として少なからぬ可能性を持つと言えるだろう。確かに、何度も繰り返すように、それは従来の構造分析等と矛盾するものではなく、両者は密接な関連をもち、どちらも、当該文化社会のより良い記述を目指すための方法であれば、優劣を付ける根拠もない。しかし、従来の社会科学の抽象化の過程で看過される部分も決して少なくなく、その点をキャラクター分析が異なる視点から明らかにしうるということは先にも述べた。しかも、特にイタリア社会では、あだ名という文化装置が発達しており、彼等の具体的な諸経験をキャラクターという形で抽象化して語るプロセスがより重要な意義をもっている。このため、このキャラクター分析という方法は、少なくともイタリア社会研究においては極めて有効であると考えられる。

では、最後にキャラクターを記述・分析する方法に関する具体的な展望について述べておこう。本稿では、三節で「ピラート」についてのイメージを逸話的に記述した。しかし、本稿の主眼は、キャラクター分析一般の可能性を示

唆することにあったので、その記述自体は今だ試案の途上である。キャラクター群を、いわゆる「社会構造の反映」的にではなく分析し記述する方法は、今後の試行錯誤を待たねばならないが、その最大の問題は、彼等の認識しているキャラクターをいかに翻訳するかである。我々は、彼等と同様の認識をすることはできない。彼等が認識しているものの意味を直接には理解できないのである。故に、我々の成しうることは、彼等が何によって認識しているのかを観察し、それを彼等が共有している象徴の体系と見なして分析することにより、そこに解釈されているものを描くことである。それには、彼等の言葉や動きをそのまま記するのではなく、彼等のもつ意味が我々にも開かれて見えるような記述が要求される。つまり、彼等の意味はどこにあるのかを適切に観察・抽出し、それを適切に翻訳できるか否かが、キャラクター分析の是非を大きく左右することになるに違いない。

又、本稿では、「ピラート」のみを取り上げて論じてきたが、R町社会全体やイタリア文化全体を明らかにするためには、多くのキャラクターを抽出し、それらの関連へと分析を進める必要があるだろう。それらのキャラクターは、先述のように、或るストーリー又はイディオムの体系とともに認知されているので、そのダイナミズムの中で分析・記述されなければならないのである。故に、これまでは、キャラクターの具体化の産物として主にあだ名を指摘してきたが、他にも、個々人に対する指示からは全く切り離された「人物」表現のための常套句や形容詞も積極的に分析対象とされるべきである。三節でも、「ピラート」に関して数多くの人物評価の形容詞が付されていた。時には、それらは「Maria di *tigna*（けちん坊マリア）」のように、あだ名に組み込まれたり、或るいは、互いの呼び掛けの時にからかいや親密さの意味合いも込めて、「*Mattacchione*（お調子者）！」「*Birbaccione*（ペテン師）！」等のように呼称としても用いられている。又、日常的な会話の中でも、これらの言葉が（極めて慣習的な使い方であり、それらの字義通りの意味を持つとは限らないが）「*quel matto*（直訳：あの馬鹿）」「*quel frescone*（直訳：あのお人好し）」という具合に、他者を指示する際に添えられる用例は非常に多い。

但し、以上の研究目的は、種々のキャラクターから最大公約数的な人物像を作り上げ、それをイタリア人の典型として提出することではないということも付け加えておかなければならない。彼等自身による「人物」像の類型化・範疇化の仕方を理解することを目的とするキャラクター分析は、パーソナリティの文化的類型論とは明確な一線を画しているのである。従来の心理人類学的なアプローチでは、我々研究者側の視点のみに依拠して彼等の性格・精神構造を抽出し、それを彼等のパーソナリティの型として提示してきたが、その類型が彼等自身の社会生活においていかなる意味を持つのかについては、何の考察もされなかった。この意味で、従来のパーソナリティ研究はエスノセントリックな偏向を交えた類型論に陥ってしまう可能性が極めて大きかったのである。

まだ、キャラクター分析を進める上で議論していかなければならない問題は余りにも多い。しかし、それらの疑問点をさておいても、ある面では我々は、自らの社会を多様な「人物」が展開する舞台として認識していることも事実であり、こうしたキャラクター的な見方そのものを通して、我々の経験が文化として共有され伝えられているのではないかという問題意識が筆者の主張であった。本稿の議論に沿って言えば、R町の文化社会の理解にとって、デルフィーノではなく「ピラート」を理解することの有効性を積極的に評価する必要があるのである。今後、このキャラクター分析が社会記述の一方法として具体的にいかなる成果を上げることができるか、慎重且つ積極的に考察を重ねていきたい。

註

(1) 本調査研究は、一九八五／八六年度及び次年度のイタリア政府奨学制度の援助を受け、ローマ大学に在籍しつつ実施したものである。この場を借りて関連諸機関及び、調査に御協力いただいた町の方々に感謝の意を表します。尚、本文中に引用したイタリア語は、R町の方言を原意に反しない程度で標準イタリア語に直したものである。但し、イタリア語自体が極めて地方性の高い言語であるので、いくつかの言葉は町の属するローマ地方方言で記した。

(2) あだ名は、例えば父方・母方に沿って継承されていくものではなく、そこに何らかの傾向を見いだすことさえ難しい。確かに、現象的には、経済的・政治的諸条件と相まって、同一のあだ名を持つ親族達の範囲が社会的に表面化する場合もあるが[Mabilia 1980]。しかし、それはあだ名のもつ社会的機能の一つにすぎず、それを親族関係・範疇の問題に直結させることは短絡的すぎる。本稿の主旨は、町のあだ名の体系そのものの分析ではないので、この点については稿を改めて論ずるつもりである。

参考文献

Banfield, E. C. 1958 *The Moral Basis of a Backward Society*, New York: Free Press.

Geertz, C. 1973 Person, Time, and Conduct in Bali, in Geertz, C. *The Interpretation of Cultures*, New York: Basic Books.

Gilmore, D. D. 1982 Some Notes on Community Nicknaming in Spain, *Man* 17:686–700.

Mabilia, M. 1980 Struttura familiare e uso de soprannome in una comunità dell' alto padovano, *Rassegna italiana di sociologia* 21:585–605.

Pitt-Rivers, J. A. 1954 *The People of the Sierra*, London: Weidenfeld & Nicolson.

Rosaldo, M. Z. 1984 Toward an Anthropology of Self and Feeling, in Shweder, R. A. and R. A. LeVine (eds.) *Culture Theory: Essays on Mind, Self, and Emotion*, Cambridge: Cambridge University Press.

宇田川妙子　一九八六「*famiglia* と *furberia*：南イタリア村落社会の非集団的試み」『民族学研究』五一、五〇—七二。

———　一九八九「イタリアの町社会における家族の社会・文化的意義：経験的事実としての *famiglia* と民俗概念としての *famiglia*」『民族学研究』五三、三四九—三七三。

（うだがわ・たえこ　東京大学大学院）